

● 中部短歌大会講演

歌の読み方



春日井建

(かすがい けん)

昨年七月十一日(土)、岐阜県下呂町下呂観光会館で中部短歌大会が開催されました。春日井先生は、塚本邦雄、岡井隆、前登志夫など、現代を代表する歌人の作品の根幹に触れ、「読み」の大切さをお話しくださいました。

☆塚本邦雄のうた — 皇帝ペンギンとは

短歌をどう歌うか、どう書くかということとは大方の歌人がいつも考えていることだと思います。NHK学園の皆さんにいたしましても、レポートの締切日というものがあり、どうしてもがんばって作品をつくらなければいけない。歌う、書く、作るというようなことは、どなたも表現をする以上関わっていると思います。

しかし、これが「どう読むか」ということになってきますと、どう書くか、どう歌うかということに比べていささか軽く扱われている。わからない歌というのがあったとしても、それは読み飛ばせば済むことで、また自分で自由に勝手に解釈をして、それで済むということも可能だからですね。

でも本当は「読み」というのは、読み飛ばしてしまったり、あなた任せでいいもの

ではないと思います。力のある作者、そしてその人がまた力を込めて書いた作品というものを十分読み取る力を養うということは必要なことですし、また新しく登場した人たちの、これまでとは違う世界というものを理解しようとする、すぐに賛成するというわけにはいかなくても、それを一緒に考えてみるというような読みも、これは大事だと思います。

歌はきちつと認識したい。実は私がこういう「読み」ということをより深く考えてみようということになったのはきつかけがあります。それは今日用意しましたプリントの最初の塚本邦雄さんの歌であります。
・日本脱出したし 皇帝ペンギンも皇帝ペンギン飼育係りも

現代短歌、そして前衛短歌を読む方にとってはもう十分知りすぎた一首だと思えます。もしかしてこの作品に今日初めて接したという方は、直感でどういうふうに読まれたでしょうか。

これについて、佐佐木幸綱さんがある読みをして、菱川善夫さんがそれについてまた言及している文章を読みました。そのの



中で佐佐木幸綱さんは「この皇帝ペンギンは天皇であろう。とするならば、皇帝ペンギンでもいいけれども、出生が日本のものではない鳥を出すよりも、ニッポニアニッポンなどという学名もある日本だけの鳥、そして今絶滅に瀕しているというあのトキを皇帝ペンギンのかわりにここへ置いたらどうだろうか」と、皇帝ペンギンを認めた上でそういう歌い方もあると言っていたわけです。そしてそれについて、もうその作品が書かれてから十年を超した後でしたが、菱川さんは「これは新しい読みだ」というふうに言って、その上で「しかしトキよりも私は皇帝ペンギンでいい」と語って

いたと思います。もちろん佐佐木さんも皇帝ペンギンが悪いといったわけではなくて、ひとつの読みをとおして、そこからトキを引き出す（ひとつの読みというのは天皇ですね）という意見でした。

今日初めて読まれた方、どうだったでしょうか。この皇帝ペンギンから何を連想されたのか。この比喩をどう読んだのか。実はその文章を読んだときに私はちよつと驚いたのです。これは『日本人靈歌』という歌集の一番最初に載っていたものです。だから「新しい読み」とか「読みの発見」ではなくて、もう最初から私は当然のこととしてこの喩を天皇と思って読んでいたわけです。

おそらくは佐佐木さんもそれは最初からそう読んでいたのであって、文章化したのがそのときであり、菱川さんもそのときにそのことについて「新しい読み」と言われたに違いないと思っではいるんですが、しかし例えば別の読み方、単にこれを皇帝ペンギンとして読むだけの「読み」もあるとするならば（つまり非常に表層的な読みですね）、歌はきちんと認識しなくてはいけな

いのじやないかということですね。自分に全く縁がないと思って『日本人靈歌』一冊を読まないというならば、これは初めから別のことですけれども、読む以上は、巻頭歌として正しく読まなければなりません。

次の歌も、これもしばしば問題になって取り上げられている歌です。しかし、優れた歌、強い歌として読まれているけれども、その「読み」については十分に書かれているものを読んだことがないので、話をさせていただきたいと思えます。

・春の夜の夢ばかりなる枕頭にあつあかね
さす召集令状

「春の夜の夢ばかりなる」と、これは非常に優雅に歌い起こしていますが、百人一首でこ存じのとおり「春の夜の夢ばかりなる手枕に」（下の句は「かひなくたたむ名こそをしけれ」といくところを、「枕頭」と。

そこから歌が急変するわけですが、周防内侍のこの優雅であるべき歌が「枕頭」となつてあつと思うや、「あかねさす召集令状」へいくんですね。「あかねさす」という枕詞、これが「召集令状」へなせつながらるのか。赤紙だからですね。あえて赤紙とは言つて

ないけれども、赤紙だからこそ「あかねさす」と、そういう形になります。戦争を体験した者にとつては、もう安らかな眠りがないとでも言うんでしょうか。枕頭とくると、夢の中にも赤紙がしのび込んでくるんですね。「春の夜の夢ばかりなる——あかねさす」、雅な言葉ですね。でもそれと裏腹な悪夢が現出する。

本歌は千載集卷十六に長い詞書がある一首です。その詞書を見てみます。

「二月ばかり月のあかき夜二条院にて人々あまたるあかして物語などし侍りけるに、内侍周防よりふして枕をがたと忍びやかにいふを聞きて、大納言忠家は枕にとてかひなをみすの下よりさし入れて侍りければよみ侍りける」

とあります。忠家というこの人は、俊成のお父さん、定家のおじいさんですね。王朝の早春の夜の戯れを描写する詞書が印象ふかい。それにしてもこんな優雅な原作から塚本は何というイメージを引き出してきたのか。さらにもうひとつ、この歌で言うべきことがあります。隠された味付け、毒の強い味付けと言つていいかもしれません。

おわかりの方も既に多いと思いますが、「枕頭」一語ですね。「枕辺」と言つては絶対だめなんです。枕頭のチンは朕思うのチンですね。だからこそ「あつあかねさす」なんです。「手枕」と言うべきところを「枕頭」と言う。この音感が「あかねさす召集令状」を導き出した。周防内侍の原作にも増して込み入ったテクニクを使った歌であります。

こういうように前衛と言われる歌人たちはいろんな試みをしております。次の岡井隆さんの作品を見てみましょう。

☆岡井隆のうた——葉とは何か

・前衛は奇形型だと人はいへ奔れるものは奇とならむ常に

「奇形型」に「アノマラス」とあえてルビを打つ。前衛というものは先頭を走るものだけれども、それはその状況に応じていろいろ動くから、非常に奇となるものである。もう少し具体的にわかりやすく言えば、例えば最近はやりのサッカーを思い起こしてください。前衛は常にその状況に従って走り回っています。常に動いています。ゴー

ルキーパーなどはいささか動くとしても場所は決まっている。前衛がいいとか後衛がいいということではありません。サッカーの中ですべてのポストが重要なものと同じように、表現の世界にもいろんなポストがあるでしょう。ひとつの思想に統一されるわけではなく、いろんな場にいるということがまた文芸の自由だと思ふんですが、その中で自分は前衛である（アノマラスとここへルビをふることによって、より奇形的になります）。そうは人は言うけれども「奔れるものは奇とならむ」。自己弁護というよりも前衛の立場とはこうだと言っているわけですね。奔れる者は自ずから奇となる。そして最後の「常に」。この「常に」が非常にインパクトが強い。では次の歌はどんなにアノマラスなのか。

・葉摺れ雨音ふたたび生きて何せむと病む声は告ぐ吾もしか思ふ

素直な歌ですね。ちよつと非情なところはある歌ですが。アノマラスには遠い伝統的な作品です。「葉摺れ雨音」と雨の音をまづ典型として出しておいて、それを聞きながら、一生懸命先生に治していただこうと

会 大 歌 短 部 中



しているが（岡井隆は医者でもありません）、ふたたび生きて何せん、と病む者は告げている。そして「吾もしか思ふ」。

何ほどのこともない普通の歌。しかし岡井隆の歌として、この一首はこれで十分に納得がいきます。例えばこの「葉摺れ雨音」の「葉」一文字を眺めてみても、いろいろ深いわけです。葉とは何か。ここでは雨に音たてている本当の葉です。しかし岡井は事に触れて葉を歌ってきたんですね。そし

てこの葉は実際の青葉、若葉の、あるいは枯れ葉の葉であるばかりではなくて、彼の医師としての仕事、肺葉の葉、つまり体の中の葉でもあるわけです。「対峙せる詩人と医師のめぐりには葉のみはげしくふかく騒げる」という歌があります。「対峙せる詩人と医師」は二人とも岡井隆ですね。自分の中であらうとも思う。一方では詩人が、一方では医師が、そしてその巡りにあるのは「葉のみはげしくふかく騒げる」んです。この葉は医師にしては肺葉、詩人にしては言の葉でもあると思うんです。そうすると現実の葉、言葉の葉、肺葉の葉という、そういうバリエーションがあるわけですね。

岡井さんの初めの頃の作品。「召命はあまくだりつつ医師となるまず狂える葉あらば癒さむ」。岡井さんはキリスト教に造詣が深い。キリスト者でもあるかと思えます。お父さんがそうでした。仕事も一種の天からの命であり、それは何かというと、医師となること。そして医師となって「まず狂える葉あらば癒す」こと。肺葉の葉ですね。しかし「召命はあまくだりつつ」、この召命

は詩を書けという召命でもあり、言の葉によつて癒すという召命とも考えられる。「手術室よりいま届きたる肺臓のくれないの葉が見えて飯食む」。これは完全に樹木の葉でないことはわかりますね。「私のめぐりの葉のみくきやかに世界昏々と見えなくなりつ」。これも有名な一首です。政治を歌い、革命を歌ってきた岡井隆が、自分の周りだけを書くようになった。私小説風に私短歌を書くようになった。つまり「私のめぐりの葉のみ」です。そして「世界昏々と見えなくなりつ」と言うのと、あまりに観念的。しかしほかの葉と一緒に読むと、岡井隆が葉に託したのが見えてくるわけです。もとへ戻りまして、「葉摺れ雨音」の葉の中にもいろんな思いがあることがわかります。

短歌は機会詩と言います。向こうからやってきたものをその都度歌っていけばいい。しかし自分にとっての大事な歌うべきもの、内省の世界、内面の世界も歌うことができるという、そういう言葉というものはあるはずなんです。だからあれもこれも向こうから言葉が来たから全部それを移すのではなくて、自分の中から積極的に言葉を選

ぶ。この場合、「葉」はそのようにして選ばれていると思います。

もうこれ以上生きなくてもいいんじゃないかとつらく訴えかける人に、「吾もしか思ふ」と一種の決意とともにそれを言う。「葉摺れ雨音」という葉がそこに出てきたこと、召命の一首と読み重ねると、さらに奥行きがでてくると思います。

☆前登志夫のうた——筏まきと猿さる

続いて前登志夫さんの歌。吉野の歌人と言われ現代において自然を歌っている人です。吉野はこの人の故郷です。しかし常にそうかというところという歌があるわけです。

・ビニールの袋につつむ幸あらむスーパー

マーケット秋の夕暮

秋の夕暮れと言いますと、三夕の歌を思い起こします。昔から秋の夕暮れは何度も何度も繰り返して歌われてきました。

心無き身にもあはれは知られけり鳴立つ
沢の秋の夕ぐれ

西行

寂しさはその色としもなかりけり楨たつ
山の秋の夕ぐれ

寂蓮法師



見渡せば花もみぢもなかりけり浦のと
まやの秋の夕暮

定家

最初の二つには自然があります。鳴立つ沢であり、楨たつ山です。最後の歌は荒涼とした風景を歌ったと言われています。周りを見回しても浦の苦屋の秋の夕暮れしかない。しかし、「見渡せば花もみぢもなかりけり」と言いながら、一瞬花と紅葉を歌ったことよってやはり自然の影がそこにあります。

それに対して、「ビニールの袋につつむ幸あらむスーパーマーケット秋の夕暮」、は何と露わで、殺風景な歌でしょう。しかしこのところで西行や定家や寂蓮の歌のほうがつつといいじゃないか、そう思う。そう思うことがこの歌の読みというか、読ませ方というか、作者の意図ですね。「秋の夕暮」とあえて型どおりにいって、そこには透けた、ある意味では哀れなビニールの袋につつむ小さな幸せを登場させる。スーパーマーケットの秋の夕暮れなんです。当然この向こうには吉野に対する自分の思いもあるわけです。

・みなかみに筏を組めよましらども藤蔓を

もて故郷をくぐれ

ふるさとまとめて花一匁、よく言うことばですし、それを使った寺山修司のよく知られた歌もありますが、あの歌よりもこちらのほうがいいのではないかと思うほど、この「藤蔓をもて故郷をくぐれ」はいい歌だと思えます。

山の水上、源流、そこでいかだを組みなさい。藤蔓を持って故郷を括りなさい。猿に向って言ってるんですが、それは作者自

身が猿だという意識がどこかにあると思われ
れます。

先ほどの岡井隆における葉のように、いか
だも時々彼は歌うし、猿も時々歌います。

「われの組む春の筏の白ければ山の猿もひ
そやかならむ」「あかときのわが急湍を流れ
ゆく春の筏よましらすやげる」自分の心
中で猿はさやいでいるわけです。猿は作者
自身と読んでもいいような歌がいくつあり
ます。「艶めきて冬の筏は流れゆく望郷の
歌ふたたびあるな」という歌もあります。

「故郷をくくれ」をじっくり読んでみます
と、たつぷりと吉野の中に入り込んでし
まった歌人の歌ではなくて、その故郷をあ
るスタンスの中で、視野の中で、距離を置
いて見ているということが言えます。すべ
てが芳醇な、豊穰な自然が在ると思うこと
は既にできないその中で、猿に向って「藤
蔓をもて故郷をくくれ」。そういうスタンス
があつてこそ「スーパーマーケット秋の夕
暮」が歌えるのではないかと思えます。

こういうように一首一首その奥を読んで
いきますと、かなりこれは楽しい作業であ
ります。

☆読みの楽しさ

・海水のしたたる肢体光らせて黒豹のごと
　　擽やかに来る

これは国民文化祭というので熊本で選
したときに、たまたま私がたくさんの中
から一番にいたしました。そうしましたら佐
佐木幸綱さんも一番にこれを推していたん
ですね。この方は今ちょっと名前がわかり
ませんが、たくさんの作品の中から思い
切って一位にしたところ、佐佐木さんも一
位にした。批評がまるで同じなんです。
佐佐木さんは「肢体光らせてこちらに来る
のがだれなのか消されているところがこ
の歌の特色である。男なのか女なのか、若
いのか年配者なのか。まあその点は若い男
性とみていいだろうが、ではその人物と作
者との関係はどうなのか、となると全くわ
からない。恋人なのか息子なのか、あるい
は特別な関係は何もない人物なのか」と、
こう言っています。私は「主語が省かれて
いるので、君と呼ぶべき人か、なれと呼ぶ
べき間か、それともだれか見知らぬ人物か。
不明だけれども、そこがかえっておもし

ろい」と同じことを言っています。そして
幸綱さんは「釈迦空に壱岐の漁民を歌った
一連があり、若い男性の裸体の官能美を
歌って有名である。私はそれを思い出した。
作者との関係を消してあるために、こちら
に来る登場人物の肉体の存在感だけがぐっ
と浮き彫りにされた」と言い、私は、「動詞
「来る」で終わるのも魅力的で、この次に
どんな場面が展開するのか、歌に動きを与
えている。単に日に焼けた人物ともとれる
が、このただならぬ迫力は逆光のせいだっ
たのかもしれない。いずれにしろ、夏の海
の官能性が十分に捉えられている」と言い
ました。数が多い歌の中のこういう読み
の一致ということで、ちょっと印象に残っ
たわけです。

しかし現代の歌は必ずしも読みが一致し
たしません。今日の皆さんの作品、選の中
でもいろんな意見が割れております。そし
てそこにこそ、また現代の歌のいろいろな
問題があるし、楽しみもあると思えます。
しかしまた読みがこうして一致することの
楽しさというものも思いました。ご拝聴あ
りがとうございます。